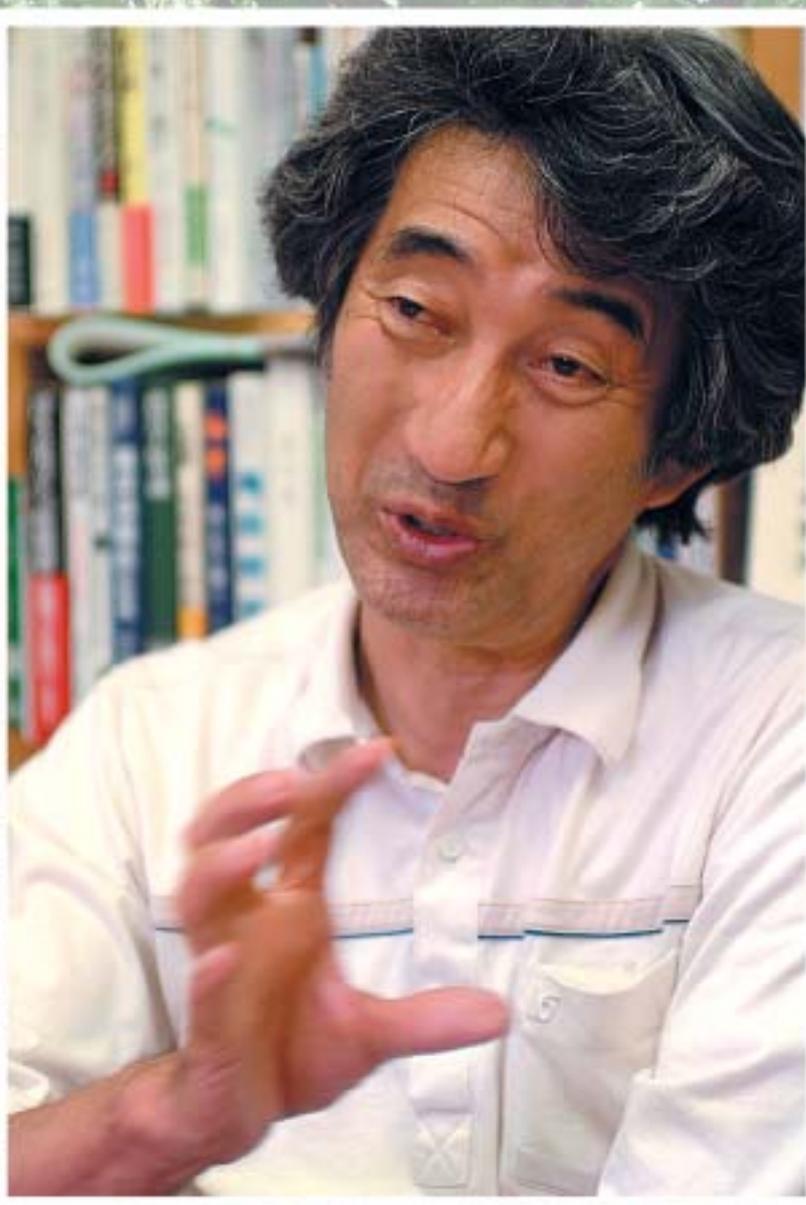


Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.8 / 2005年 秋

森に木を植えることは、人の心に
木を植えることと同じなんです。



地球となかよしインタビュー
豊かな自然を次世代につなぐために 畠山重篤 2〜3

知っておきたい教育NOW
総合的な学習への複雑な期待 新井郁男 4〜5

有田和正のおもしろ授業発見!
いま、なぜスクールリーダーか 小島弘道 6〜7

環境活動に楽しくチャレンジ
インフォメーション北から南から 12〜13

BOOK REVIEW 14 / 10代 心のカルテ その
香山リカ 15

ほっとな出会い 原田雅彦



地球となかよし
インタビュー

豊かな自然を次世代につなぐために 畠山重篤さん（牡蠣養殖業）

宮城県の気仙沼湾で牡蠣養殖業を営む畠山さんは、豊かな海を取り戻すために仲間の漁師と共に大川の上流で植林運動に取り組んだ。「森は海の恋人」と名づけられたこの運動は、漁師をはじめ、多くの人々の共感を得て全国に広がっている。

漁師の畠山さんが、森に木を植えるようになったきっかけは何ですか。

公害問題が全国的に拡大していた頃、気仙沼湾でも赤いプランクトンが大量に発生しました。湾の奥で発生した赤潮が、秋の北西の季節風で湾全体に広がったのです。牡蠣は一日に二〇〇ℓの水と一緒にプランクトンを吸って食べています。魚と違って自分の好きなえさを選ぶことはできませんので、自分の周りに赤潮があれば当然吸ってしまいます。その影響で、白いはずの牡蠣が人間の血のような毒々しい赤色になりました。それは血牡蠣と呼ばれ、廃棄処分になったのです。

その時私は45歳で、子どもたちも大きくなり、次の世代のことも考えないといけない頃でした。追い打ちをかけるように、気仙沼湾に注ぐ大川の河口からたった8kmのところにもダムを建設する話もちあがり、ますます漁場環境の悪化に拍車がかかることになるんですね。そういう時に、たまたまフランスの有名な牡蠣の産地であるロワール川の河口

を視察する機会がありました。そこは牡蠣の状態もよく、干潟には点在する潮溜りにカニやエビなどの生き物がたくさんいるんですよ。こんなに海が豊かなのはなぜだろうと考えた時、これはこの海に流れ込んでいくロワール川がいいからに違いないということが直感でわかりました。私は川を遡ってみることにしました。

すると、その流域にはブロアの森など有名な落葉広葉樹の大森林地帯が広がっていました。なぜフランスには豊かな森が多いかというと、後でわかったことですが、フランス人はシカ、ウサギ、イノシシなど野生の動物・鳥類を食材としたジビエ料理が大好きで、これらの動物が育つには、えさやすみかとなる実のなる木の森が必要だからなのです。フランス人は環境保護という見地からだけでなく、おいしいものを食べたいから森と川と海の関係を大切に守ってきたのだということがわかりました。森がしっかりとっているから川がいいんです。川がいいから魚も豊富だし、そして当然海もいいわけです。

そこで、帰国後「牡蠣の森を慕う会」を漁民の仲間と立ち上げられたのです。

そういうことがわかって、ハッとしました。今まで漁師は海の方ばかり見ていました。気仙沼では「太平洋銀行」という言葉がありますが、太平洋は銀行と同じで、いつでも太平洋に行けば生活の糧が得られると思っていました。しかし、フランスでの経験から、沿岸で漁業をしている我々は海とは反対の山にも目を向けなければならぬということに気づかされました。

早速、気仙沼湾に流れ込む大川を遡ってみると、川の流域に人間模様の縮図がありました。当時は、ごみも多く排水の規制もないので、工場排水などがそのまま垂れ流されていました。

河口は魚の油が石垣にいつばいついて悪臭を放っていました。上流へいくと、確かに水はだんだんきれいになります。流域の田んぼは昔と違って静まりかえっています。まさにレイチエル・カーソンの「沈黙の春」の世界です。農薬や除草剤によって生き物がいなくなったのです。また、山では雑木林がほとんど切られて杉山に変わっていました。しかも手入れが行き届かず日の光が差し込まない



畠山重篤さん プロフィール

1943年中国上海生まれ。宮城県気仙沼湾で牡蠣養殖業を営む。「牡蠣の森を慕う会」代表。1989年より「森は海の恋人」をスローガンに、漁民による植林活動を続ける。1999年「緑の日」自然環境功労者環境庁長官表彰、2000年環境水保賞、2004年には宮沢賢治イーハトーブ賞、河北文化賞を受賞。現在、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授。著書に『森は海の恋人』（北斗出版）『リアスの海辺から』（文藝春秋）『日本＜汽水＞紀行』（文藝春秋）『漁師さんの森づくり』（講談社）『カキじいさんとしげぼう』（講談社）などがある。

ので、下草が生えていませう。そのため山がバサバサで、雨が降ると泥水であつという間に海が濁ってしまいました。山が荒れているんです。下流から上流



畠山さんが牡蠣を養殖する波静かな入り江。

まで歩いてみて、まるで昭和史を目の前に見るようなシヨックを受けました。そこで、漁師の仲間に話をし、大川の上流の室根山にフランスで見た広葉樹の森をつくらうと呼びかけて、我々の「森は海の恋人」運動が始まりました。



畠山さんは森づくりの一方、子どもたちの教育を重視されていますね。

「森は海の恋人」というフレーズは、歌人の熊谷龍子さんに考えていただきました。また、第一回目の植林のイベントが報道されると、漁民だけではなく、森林破壊や川・海の汚染を憂えている全国の方々から、よくぞ「森は海の恋人」と言ってくれたという励ましの声をいただき、植

林にも多くの方がかけつけてくれました。翌年から室根山の小学校の子どもたちをここに呼び体験学習を通して、森と川と海との関係を学んでいく活動を始めました。子どもの時から森と川と海はつながっているということを体験を通じて教えて、その子どもたちが育っていったらいいなと思う。この活動も今年で16年目で、もう七、〇〇〇人からの子どもが来ています。最初に来た子どもの中には、ここでの体験学習の経験から大学でプランクトンを研究している子どももいますし、学校の先生になったという子どももいます。思わぬ効果がありました。また、このことは中学校の国語の教科書にも書きましたが、子どもの感想文に「体験学習に行った次の日から朝シャンのシャンプールの量を半分にしました」と書いた子どももいました。これを読んで、やはり子どもたちへの教育こそが大切だということを確認しました。子どもたちがそういう気持ちになったということが大切なのです。つまり、森に木を植えることは、人の心に木を植えることと同じなんですね。

現在、畠山さんは京都大学の社会連携教授としても活躍されていますね。

「森は海の恋人」運動も17年目になり、ひとつ大きく進捗したのは学問の縦割りが変わってきたことです。私たちの活動を耳にし、研究者としてバラバラに研究してきたことに少し反省がおきたようです。今までは、学問間の交流はなく、森から海までの関係はほとんど説明されていなかったのですが、やっと学問の世界でも自然はつながっていて、ひとつのものとしてみななければいけないという認

識になってきたのです。

そんな中で、京大では世界初の人と自然の共存の在り方を提示する「森里海連環学」という学問を起しました。いくら森がふくらんでよくなっても、人間が海まで視野に入れて生活していかないと、最終的に海もきれいにならないという発想です。どちらかといういままでは、理系の分野の問題として取り上げられてきましたが、文系もここに関わらなければいけないことです。いわゆる大学の総合学習のようなものです。大学の各部が持っているフィールドを大同団結して、「京都大学フィールド科学教育研究センター」を設置しました。私にも協力者の要請があり、ニッポンさんと共にこのセンターの研究に参加しています。

「森は海の恋人」運動は、地球環境問題を考える方向性を示唆していますね。

今、環境問題で最大の課題はCO₂の問題です。この問題で大切なのは、毎日排出しているCO₂を削減すると同時に、森林をきちんと保全することです。森林には光合成によって大気中のCO₂を吸収し固定する働きがあるからです。

実はもうひとつ、日本の周りの海にも森があるんです。日本海と太平洋に、二級河川まで含めると二一、〇〇〇本の川が流れ落ちていますが、その汽水域（淡水と海水が混じり合う水域）は緑濃い森なのです。この汽水域の光合成の力、つまりどれくらいCO₂を固定しているかという研究が進み、地上の全森林の光合成の量と海のプランクトンと海藻類の光合成の量を比べると、どうも海のほうが陸よりも力があるのではという話も出てきています。汽水域の光合成の力が明

らかにになると、京都議定書の日本のCO₂削減目標の数字が大きく変わってきます。「森は海の恋人」運動の考えに立って人間が川の流域でどういった生活をしていくか、国としてどういう考えでこれを整えるかということは、実はCO₂の問題にまで絡んできているのです。

西洋文明はパンと肉を主食にした文明で、それを追い求めていくと森林がどこまでも破壊されます。つまり、斜面でも畑が出来るからどんどん木を切り、家畜を放牧すれば草木を全部食べてしまつので、森は絶対に復活しないとされています。それに対して、日本は米と魚を主食にしている文明です。田んぼは夏の雨を当てにしなければならぬし、平らなところにはつかつかれませんか、山をしっかりとつかつかれませんか、山をきまかせん。その結果として森林が残り、田んぼから流れて来たものが海の魚介類を育てたわけですね。

そう考えると、魚と米を食べるといふ文明は、我々が思っているより重要な意味があるのではないのでしょうか。世界中で、人間の欲望のままに便利さを追い求める生活ではなく、人間生活の在り方や暮らしをもう一度見直そうという機運が生まれています。いま、京大と国際日本文化研究センターで、21世紀の文明モデルのあり方について取り組んでいます。日本の食文化こそ21世紀の文明モデルだと言っています。そしてその原型は、ここ気仙沼にあると……

「森は海の恋人」運動を通して、最終的に言えば人間が何に価値観を持ってどう生きるかということをやりました。「人の意識が変われば自然が変わる」ということをこの気仙沼から発信していきたいと思っています。

総合的な学習への複雑な期待 「義務教育に関する意識調査」から



放送大学埼玉学習センター所長 新井郁男

低かった教員の回収率

文部科学省から平成一七年六月一八日、「義務教育に関する意識調査」の速報結果が公表された。これは同日開かれた中教審義務教育特別部会で報告され、その後マスコミなどでも取り上げられ論議を呼んでいる。

この調査は全国から無作為抽出された小学校一五校の四〜六年生全数（三、三五〇人）、中学校一〇校の一〜三年生全数（二、九二四人）、無作為抽出された小学校一五校及び中学校一〇校の保護者全数（回収率六八・五％で回収数六、七四二人）、全国の小学校の学校評議員（九四一人）、回収率一七・二％で回収数八〇八人）、無作為抽出による小中学校一、二一九校の校長・教頭・教員（回収率二五・七％で回収数二、五〇三人）、都道府県・市町村の教育長（悉皆、回収率三七・八％で回収数一、〇三八人）と首長（悉皆、回収率二八・六％で回収数七八五人）を対象に行われたものである。調査時期は、小・中学生、保護者については平成十七年三月、他は三月から四月にかけてであり、学校としては特に多忙な時期であったとはいえ、教員の回収率の低かったことが気にかかる。

調査内容は、小・中学生調査では、学校の勉強の様子、「総合的な学習の時間」について教師・学校に

望むこと、学校の満足度、家庭生活の様子など、保護者調査では、学校とのかかわり、学校教育への期待、「総合的な学習の時間」について、教育改革への賛否等、学校評議員調査・教育長調査では、学校教育への期待、「総合的な学習の時間」について、教育改革への賛否等、教員調査では、日ごろの実践、「総合的な学習の時間」の取り組み・成果、教育改革への賛否等、首長調査では、学校教育への期待、教育改革への賛否等となっている。

報告でも指摘しているように、前述のような調査対象の選定方法や回収率の低さなどから、調査結果が母集団としての全国の児童生徒、保護者、学校評議員、教員、教育長、首長の意識を代表しているとはいえない。したがって、結果の分析にあたってはそのことを念頭に置いておく必要があるが、これからの義務教育の在り方を考えていく上での視点を多く提示している。

詳細な分析は一〇月をめどに最終報告書としてまとめられることが予定されているようであるが、単純集計だけのこの速報にも、これからの義務教育の在り方を考える上で注目すべきと思われる結果が現れている。

その中でここで特に注目したいのは、首長以外のすべての対象に共通に問われた「総合的な学習の時間」（以下、「総合」）についての意識である。

「総合的な学習の時間」への複雑な期待

まず、小・中学生についてみると、「総合」を「とても好き」な小学生は二七・二％、中学生は一七・四％と意外と「総合」への好感度が低い。「まあ好き」を合わせても小学生六〇・〇％、中学生四六・二％にすぎない。他教科と比較すると、図1にみるように、音楽、体育、図画工作など、活動を伴う教科への好感度のほうが高くなっている。理科嫌いが問題になっているが、小学校四年と五年では「総合」より理科への好感度のほうが高い。逆に、調べ学習の多い社会科学の好感度が、小学校では「総合」より低い。この傾向は筆者が千葉市総合教育センターと共同で行った千葉市内の調査でもみられた。経年比較をすると、「総合」が導入されてから、社会科学への好感度が低下している。これは社会科学における調べ学習など子どもが主体的に行う活動が、「総合」が始ま

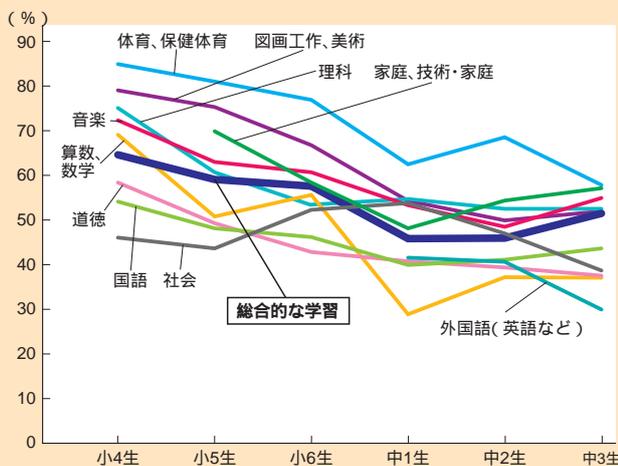


図1 教科等の好き嫌い（「とても好き」「まあ好き」の合計）

つてから、社会科学から「総合」に移動してしまっただことによる部分が多いのではないかと考えられる。

また、小学校から中学校にいくにしたがって、「総合」好感度が低下していることが気になる。これは小学校で体験してきたことが、たいした深まりもなく中学校で繰り返されることの傍証かもしれない。中学校が小学校でどのような「総合」が行われたのかを踏まえていないことによるように思われる。

今後検討すべきだと思われることは、「好き嫌い」がいかなる理由によるのかということであろう。「好き嫌い」とは別に、「総合」についての考えや役立ち感も調べられている。それによると、「ふだん体験できないことが体験できる」と考えているものが小学生で七七・八％、中学生で七二・一％である。これは「総合」が「とても好き」と「まあまあ好き」の合計より高い比率である。また、「国語や算数・数学など教科で勉強したことが自分にとって大切なことだとわかった」とする小・中学生は、それぞれ八〇・五％、五五・七％であり、やはり好感度が高い。体験できるから、また、教科での学習の意義が認識されたからといって、必ずしも「好き」だとは限らないということである。逆に、「自分で考えなければいけないので、何を調べたり勉強したりしてよいかわからない」とする小・中学生が、それぞれ三四・四％、四九・三％いる。また、「ひとつのテーマに時間をかけすぎていて、たいくつだ」と考える小・中学生が、それぞれ二七・八％、三二・六％いる。これを見ると「総合」がいわゆる「はい回る経験主義」になっている面が多いのではないかと考えさせられてしまう。しかし、好感度と意義の認識度などとの間にどういう関係があるかは、それぞれの質問についての単純集計だけではわからない。クロ

ス集計など詳細な分析が待たれるところである。保護者、教員など大人の「総合」についての評価はどうであろうか。図2にみるように、「とてもよい

と思う」者の比率は、おしなべて低い。保護者と教員は一〇％未満である。「まあよいと思う」という消極的賛同者を入れると半数を超えるが、子どもを身近に見ている者、実際に「総合」

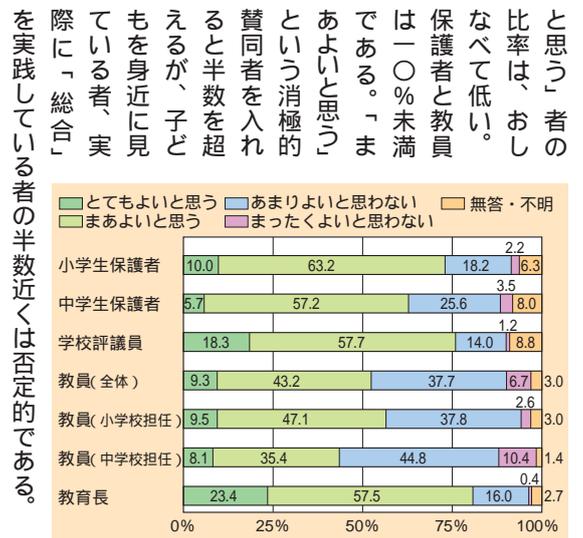


図2 「総合的な学習の時間」についての評価

を実践している者の半数近くは否定的である。では、「総合」には意義は認められていないのだろうか。そうでは必ずしもない。教員の「総合」の取り組みに対する考えは次の上表のようである(「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計%)。このように教員は「総合」には大きな教育的意義があることを認めている。しかし、問題もあることが、次の下表の回答からうかがえる。

- 自分で調べたり、考えたりするなど、積極的に学習する意欲や表現する力が身につく 75.1
- 教科の枠を越えた横断的・総合的な課題について学習できる 73.9
- 地域の特性や学校の創意工夫を生かした特色ある教育が展開できる 69.3
- 自然体験や社会体験などさまざまな体験活動を行うことができる 82.4
- 教科で学んだ知識や技能を実際の場面で活用できるようにする 43.0
- 教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る 78.7
- 単なる体験になっており、教科との関連が不十分で学力が身につかない 62.8
- 教科の時間が減っており、基礎的・基本的な内容の学習があるそかになる 70.4
- 「総合」で学んだことは実生活や受験で役に立たない 28.3
- 教材作成や打ち合わせなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくて大変 82.7

実生活や受験に役に立たないと考えている教員は三割に満たない。よく「総合」導入は受験に不利だということが言われるが、教員は必ずしもそうは考えていない。また、保護者でもそう考える者の比率は三二・一％である。

以上の調査結果から推察されることは、「総合」には教育的意義があるが、教師の力量に問題があることと教師の負担が大きいたがネックであることである。「総合」が単なる体験になっているというのも、教師の熱意や指導力の問題に帰着するであろう。

「総合的な学習の時間」の今後の在り方

では、今後、「総合」はどうあるべきだろうか。調査によると、教員で「このままでよい」と考える者は二割に満たないが、「もっと充実すべきだ」と考える者も三割程度にすぎない。保護者は四四％が「もっと充実すべき」と考えているが、教師のほうはそれほどでもない。それはいまでも大変なのに充実させるとなると、さらに大変になるということがあろう。「総合」は「なくしたほうがよい」とする者が四六・三％もいる。

一方、五一・九％の教員が「専門の先生を置くべき」、四三・三％が「国で指導内容や学習活動を明確に示すべき」、七〇・八％が「必要な経費をもっと増やすべき」と回答している。では、これらの条件が満たされれば、「総合」はなくなってもよいのかは、単純集計ではわからない。

筆者は、「総合」の時間を削減し、教科の時間を若干増やしても、問題が解決するわけではないと思っている。政策の決定にあたっては、今回の単純集計結果だけで判断するのではなく、詳細な分析に照らし、さらに種々の学力調査の結果を「総合」に力をいれている学校とそうでない学校と比較することなども考慮してほしいものである。

いま、なぜスクールリーダーか 中教審教員養成部会の議論から



筑波大学大学院人間総合科学研究科教授 小島弘道

学校管理職とスクールリーダー

「スクールリーダー」という用語は、最近よく使われるようになってきたものである。そうは言っても、スクールリーダーがこれまで使われてこなかったというのではない。日常的にスクールリーダーと云い、ある何かをイメージして口にしていたことはある。学校指導者という用語は日本教育経営学会関係者は以前から用いていた。スクールリーダーについてはそう多くはないが、本のタイトルとしてもあった。しかしスクールリーダーについて自覚的に、かつある問題意識を持って、ある目的のために使われるようになったのは比較的新しいことである。

二〇〇一年一〇月、日本教育経営学会は準国際特別シンポジウムのかたちを持たせて「スクールリーダーの養成と大学院の役割」を開催した。そこでのスクールリーダーのイメージは主として学校にあつてマネジメント型のリーダー、とりわけ校長や教頭を念頭に置いていた。もちろん事務長、指導主事、教育長を視野に入れてこなかったわけではない。視野には入れてはいたが、校長や教頭を直接的に、いや校長に特化してスクールリーダーをイメージしていたことは事実である。それではなぜ、学校管理職とか、校長・教頭という用語があるにもかかわらず、スクールリーダーという用語を使い、ものごとを語

り、あるイメージを持たせるようになったのか。その理由は、スクールリーダーの用語が持つ広がりや膨らみのニュアンスがあるため、以下に示すようなアレギーがなくなるのではないかとする思いがあったのではないかと推察する。

つまり、学校管理職や校長・教頭、さらには主任の用語に対する学校現場にあるアレギーや後ろめたさの存在に気を遣い、もしくは「手垢にまみれた」これらの用語を使わないならば、実質、これらの職制の資質能力を高めることを大学としても行政としても、できるのではないかとする期待があったのだから。もしくはもっと積極的に行うことができるとする暗黙の了解や期待があつたように思われる。近年の学校経営改革で学校管理職及び主任層の役割が重視されるにつれて、彼らの力量をどう高めていくかが各方面から関心が持たれるようになり、その力量の向上、また、そのための組織的、計画的な研修、さらには大学院との連携ないしは大学院による養成にまでその関心が向かった。

大阪教育大学と大阪府教育委員会は連携協力して「スクールリーダー・フォーラム」を合同で行ってきた。また大阪教育大学はスクールリーダー・プロジェクトを立ち上げ、その在り方、実践を積み重ねてきている。こうしたスクールリーダーの力量形成への取り組みは、前述した学校管理職等の資質能力の

向上をフォーマルな目的として、スクールリーダーという用語を用いている。スクールリーダーの方がイメージとして受けがいい、ニュートラルな感触を持った用語として受け止められたからである。報告書によると、スクールリーダーには、校長・教頭の学校管理職（狭義）、「学校づくりの中核を担う教職員」として校長・教頭とともに省令主任、事務長（広義）、教育行政職員である指導主事・教育長（最広義）の定義があるが、ここでは広義の定義とするとしている（大阪教育大学スクールリーダー教育検討報告書「2004年10月」）。

マネジメント型リーダーと 専門職型リーダー

スクールリーダーを「広義」に捉えることは分かりやすいし、同感できる。その場合、筆者はスクールリーダーをマネジメント型リーダーと専門職型リーダーに分け、それぞれについて学校づくりに向けて期待される役割を考え、またその役割を遂行する力量形成について構想することが必要なことではないかと考える。

中教審教員養成部会は、教員の資質能力向上のために免許更新制を含む教員養成の在り方について諮問を受け、現在、検討中である。そこでは「教職大学院」（これを「師範大学院版」と言う人もいる）設置を検討するとともに、「スクール・リーダー」についても言及していることが特徴である。教員養成分野における専門職大学院の目的・機能のひとつに、「現場での一定の教職経験を有する小・中・高等学校等の現職教員を対象に、地域における指導的教員や、将来、指導主事、さらには学校の管理者となる上で不可欠な確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えた『スクール・リーダー』の養成」が特に期待されると述べているように、スクールリーダーを校

	マネジメント型リーダー	専門職型リーダー
役割・機能	学校経営のビジョン・戦略の策定と実施運営にかかわるトップリーダー 校長等への補佐、部門活動の企画・実施運営にかかわるミドルリーダー	教科・領域等で指導的役割を果たしうるスペシャリスト 学習・生活の支援・教育の総合的企画・実施運営しうるコーディネータ
担い手	校長、教頭、事務長、主幹等	「スーパーティーチャー」「学習・生活支援コーディネータ」等のミドル <各種主任>
業務の性格	学校の経営・管理的業務	学習・生活にかかわる専門的指導業務
達成すべき目標	総合的学校力の構築	子どもの充実感・達成感・自己実現等

表 スクールリーダーのイメージ

長・教頭の管理職などの特定の職に限定せず、現職教員の中から学校や地域における指導的教員のほか、指導主事や学校管理職をスクールリーダーとしてい

こうして今やスクールリーダーは学校管理職としての学校指導者、つまりマネジメント型のリーダーだけでなく、指導的教員、つまり専門職型のリーダーを包み込んでスクールリーダーと定義するようになってきた。

筆者は、従来、我が国にあつては教職の頂点ないしは目標に校長職があるようなシステムになつてきた。つまりマネジメント型リーダーである「プロフェッショナル・スクールリーダー」と専門職型リーダーである「プロフェッショナル・ティーチャー」の二つのスクールリーダーを想定し、その養成を大学院教育に期待してきた（小島弘道編著『校長の資格・養成と大学院の役割』東信堂、2004年）。さらに最近ではマネジメント型リーダーと専門職型

リーダーに区分し、それぞれのリーダー（スクールリーダー）を大学院で養成する必要を主張している（連載「新しいスクールリーダー像 30代・40代教師への提言」『学校マネジメント』2005年4月号）。

ここで専門職型リーダーのなかには、特定の分野で高い専門性とその能力を有したスペシャリストの教員のほかに、さまざまな専門や立場から子どもの指導にかかわるスタッフ（教職員、各種の主任、養護教諭、栄養士、カウンセラー、学校ボランティア、地域の人材等）の能力や特性を生かして、学校における子どもの学びと生活を総合的に企画し、実施運営するジェネラリストを含むと考えている。後者の一例が「学習・生活支援コーディネータ」である。

以上のように、スクールリーダーはマネジメント型のリーダーにとどまらず、専門職型のリーダーとしても受け止められるようになってきた。こうして「スクールリーダー」は学術用語として認識されることになった。これに関連して「スクールリーダーシップ」が一定の学問的概念となり、新しい研究分野を構成しないしは開拓することになってきていることも付言しておきたい。

教育事業の経営体としての学校

スクールリーダーへの現在の関心状況はこれまでのものと随分違つて語られてきているように思われる。それは第一に団塊の世代が大量退職する時代を迎え、他方、教員の大量採用時代に突入することから、すぐれたスクールリーダーをどう確保し、どう育成するかが緊急の課題となつてきていることである。また地方分権と規制緩和による学校の裁量権拡大のもと、学校を教育事業体として確立し、それに責任を持つて経営しうる力量が校長に要求されるようになった。同時に校長のこうした経営を補佐し、校長のリーダーシップの発揮を可能にする経営スタ

ップの充実が求められるようになったからである。教頭は言うまでもなく、ミドルリーダー（の一部）にもその機能を期待し、これらが「経営陣」として校長をサポートする体制が敷かれるようになった。

学校を教育事業の経営体とする認識は、日本の学校経営の基調にはなかつたものである。基調にあつたものは、学校の経営機能を教育委員会（教育行政）に引き寄せ、学校は主として管理機能を担つとする認識である。当然に学校の権限は限定され、学校経営と言つても現実は行政主導の学校経営だった。そうした状況を変え、学校を名実ともに教育事業の経営体として機能させようとする改革が今展開している。

また子ども問題や教育課題の多様化と複雑化は、校長に高度な問題や課題を解決する力量を求めることになった。これは学校の裁量権の拡大と並んでマネジメント型リーダーだけでなく、専門職型リーダーへの期待と役割を高めることになる。ところが、子ども問題に対しては、たとえばカウンセラーを一定時間配置し、子どもの「心」を読み解き、支援するだけでは問題の解決にならないことが次第に明らかになってきた。教職員それぞれの専門性や活動を問題の解決に向けて総合的、全体的にコーディネートする機能と専門家が日本の学校にはいないのである。こうした専門家（「学習・生活支援コーディネータ」）を育成して学校の総合力としての学校力を高めることが今日の学校問題を解決する道だと考える。

今、学校力と言つたが、学校力は教育の質、教師の質、経営の質、安全・危機管理の質、そしてスクールアイデンティティの総和である。現在必要なことは、学校力を構成する個々の質を高めて学校の総合力を膨らませ、充実させることである。これを可能にするためにこそ、マネジメント型リーダーと専門職型リーダーの二つのスクールリーダーの力量が問われていると言つべきだろう。



有田和正の
おもしろ授業発見! ⑧

東京の鉄道は便利か不便か?

子どもがみごとに鍛えられた山下真一先生の授業

教材・授業開発研究所代表 有田和正

1. 社会科よ、元気を出して!

総合的な学習などに比べると、社会科の授業や研究会は今一つ元気がない。社会科をこよなく愛する者として淋しく思っている。とともに、「何とか元気を出させたい」「元気あふれる社会科の授業をやってもらいたい」と願ってやまない。

だから、ちょっとでもよい授業に出会おうと本当にうれしくなる。今回の授業(社会科4年「わたしたちの東京」)も、問題が多すぎるけれども、教材が面白いし、むずかしい資料を4年生の子どもが必死で解読しているところがすばらしかった。

「いい教材は、いい授業を創る」という“教材開発”のコンセプトが生きている授業でありたいと思った。

今回はわたしが感じた問題点も書いていくことにする。

2. 交通の広がりや街づくり

本時は、「東京のイラストマップをつくらう」「受け継がれた技を生かす」「東京ってまちはどんなまち?」「交通の広がりやまちづくり」という展開順の最後の「交通の広がりやまちづくり」の2時間目である。

単元のはじめから計算すると25時間目にあたる。単元の中心部といってよい。小単元名は「便利な鉄道と高速道路」である。

(1) 中心資料の提示

授業は、次のような23区の駅に半径500mの円を記入した資料の提示から始まった。

「この資料をみて、わかったことを発表しなさい」という教師の指示に、子どもたちはすぐに反応した。「皇居のまわりに鉄道の駅がある」「駅から1km以内に駅がある」「北東の方に駅が少ない」「南東の方に駅が重なっている」「だから乗り換えに便利だ」。

わたしは、提示された地図をみて、何を表しているかよくわからなかった。子どもの発言を聞いているうちに、「そういうことを表しているのか」とようやくわかってきた。

子どもたちの反応をみて、教師は「東京(23区)の鉄道のよさは何だろう?」と問いかけた。

「乗り換えが便利」「たいいていの所へ電車で行ける」「多くの人が電車を利用できる」「歩く時間が短い」「車を使わなくてす



む」といった利便性を次々とあげていった。

このクラスを担当しておよそ1年、子どもをよく鍛えているなど感心した。子どもたちは、600名近くの先生方が参観する中、ものおじすることもなく、マイクをもって堂々と発言する。

一番すばらしいと思ったのは、「まちがいを恐れないで、どんどん自分の考えを発言する」ことである。このあたり、よく育てているなど感心した。

(2) 白熱した討論になったけれど

資料を全体的に見ることが一段落すると、「一番利用客が多い所はどこでしょう?」と教師は角度のある発問をした。今まで漠然としていたところから、資料の見方に「利用客の多さ」という角度が出た。

「東京か池袋」「いや渋谷」「いや新宿だ。電車が何本も通っているから」……。

教師は「東京と新宿は、どちらが乗降客が多いか?」と問う。子どもたちの予想は、「ターミナル駅の東京駅だ」「新宿は乗り換えのだけ」などという。

東京はターミナル駅で、新宿は乗り換え駅だと子どもの考えをまとめる。つまり集約・焦点化させたのである。このやり方はうまい。

こうしておいて、「1日の乗降者、新宿320万人、東京88万人です」と、子どもが調べることのできないことをみこして、教師がきちんと示した。

子どもたちは、「あっ!」といった。次の瞬間、その理由を考えている。下の写真をみてほしい。指を折って、東京駅にはいくつの電車が乗り入れているか、新宿駅にはいくつの乗り入れがあるか数え出したのである。教師の指示によってではない。子どもが自ら数え始めたのである。

「勉強のしかたを知ってるな!」と感動した。社会科のクラスはこうでなくちゃ!

東京 - 13の電車、新宿 - 9つの電車

子どもたちは、東京が多いのは「新幹線がいくつもあるから」という。「新宿は9つだけど、乗り換えが便利だ」という。

このあたりの読み取りはすごい。

「新宿は乗り換えが多いから数えられるが、東京は改札口を出ないから数えられないからではないか」という意見に対して、多様な意見が出た。

「東京駅は乗り換えしにくい」「新宿はいちいち乗り換えなくてはならないから、便利じゃない」「いや、新宿まで一直線で行けるから便利だよ」「東京は出入り口が少ないから、便利のようで便利じゃない」「いや、東京からはどこへでも行けるから便利だよ」

「何をもちて便利」とするか個人差があるため、白熱した討論の割には、かみ合わない。つまり、「便利」「不便」の根拠が一人ひとり違うのである。

ここで教師は、「何をもちて便利とするか不便とするか、根拠を出しなさい」というべきなのである。

しかし、教師は「どちらが便利か?」というばかりで、根拠のところへ話を進めない。

わたしはみていて、いらいらした。

社会科は、きちんと根拠を示して、「だから、
である」と考えるべきなのである。



こんな場面を見のがしてはいけない!



3. わたしの講評

この授業について、わたしに「講評しろ」といわれた。先輩として少し厳しい講評をした。そうしなければ、600名もの参観者が納得しないだろう。

第1に、社会科はもっと単純明快な資料を使うべきである。わたしにもよくわからない資料で、他県の人には全くわからないだろう。

身近な資料から広い世界がみえるものでなくてはならないし、調べ方が多様に工夫できるものでなくてはならない。そして能力に応じてどこまでも追究できるものでなくてはならない。教材を深く研究すれば単純化できるはずである。「いい教材(資料)は、いい授業を創る」ことをもう一度考えてほしい。

第2に、授業はスイカである。面白いところ(おいしいところ)を最初に出すべきである。例えば、トイレの便器の数は、新宿駅は320万人の乗降客に対してわずか78個、東京駅は88万人に対して478個である。トイレから考えればどちらが便利とか、考えるポイントはいくつもある。もっと数にこだわるとわかりやすくなる。

第3に、話し合いのしかたであるが、話し合うことによって新しい価値が生まれてくるようにしなければならない。中途半端で終わっている。しかも、発言がすべて「~だ」という常体である。これは「~です」「~と思います」というようにすべきである。

第4に、よかった点であるが、子どもの発言は、「何という資料の、何ページに、こう書いている。だからこう思う」という発言のしかたは社会科的ですばらしい。教師の板書は、子どもが書けるスピードでゆったり書いて、文字もうまかった。やはりいい授業といえよう。



こどもエコクラブイメージキャラクター
エコまる

環境活動に楽しくチャレンジ

はじめよう「こどもエコクラブ」

こどもエコクラブ全国事務局

「こどもエコクラブ」は、小・中学生なら誰でも参加できる環境活動のクラブで、環境省が各自治体と連携して支援している。平成一六年度は、約四、二〇〇クラブ、約八三、〇〇〇人の会員が参加し、地域の大人を巻き込んで多彩な環境保全活動を展開している。

「ごみの分別やエコバッグの持参、地域緑化や環境配慮型商品の購入など、環境保全に結びつく行動はいろいろあります。何かやりたいけど何からどうやって始めたらいいか分からず、行動に移せずにいることはありませんか？ そんなとき、「こどもエコクラブ」は活動の第一歩になります。



こどもエコクラブのしくみ

小・中学生が数人以上集まりグループを作り、「サポーター」と呼ばれる活動を支える大人（先生や家族など）を決めれば、誰でも登録できます。登録は、市区町村の環境担当窓口を通して行います。これにより、市区町村と連携をはかりながら、地域の中で子どもたちの環境活動を支援していくことができます。

ツトが届きます。

ニュースには他のクラブの活動内容の紹介や分かりやすい環境情報などを掲載しています。また、気軽に取り組める環境学習・活動プログラムを掲載していますので、まずはそれから始めるなど無理なく環境活動をスタートすることができます。クラブの活動をサポーターするしくみとして、「子どもエコクラブ応援団」があります。ボランティアで助言や指導をしてくれる人たちが、環境カウンセラーなど専門知識を持つ人が登録しています。また、企業・団体から「こどもエコクラブパートナーシッププログラム」として提供いただいている支援を受けることもできます。



自分たちで考え、自由に行動する

こどもエコクラブの活動には、決められたかたちはありません。子どもたちの興味・関心に基づいて、自ら考え、自ら行動できる環境活動に自由に取り組みます。生きもの調査やまちのエコ探検、リサイクル活動やエネルギーチェックなど内容も



「こどもエコクラブ」のキット(上)と
こどもエコクラブニュース(下)

いろいろ。年間を通して一つのテーマに取り組むクラブもあれば、いろいろな活動に挑戦しているクラブもあります。また、こどもエコクラブニュースで紹介する環境学習活動プログラムに取り組むクラブもたくさんあります。

活動後の報告の義務はありませんが、報告を提出することによって受け取る「アースシール」を四枚集めると、年度末に「アースレンジャー認定証」を申し込むことができます。

他にも、活動内容を模造紙大の「壁新聞」にまとめると、「こどもエコクラブ全国フェスティバ



こどもエコクラブに登録すると

こどもエコクラブに登録すると、会員手帳やニュース、メンバーズバッジなどの活動に役立つキ



「沼袋小こどもエコクラブ」のピオトップ作り



沼袋小学校の「エコタイム」



「ヤマメクラブ」の町のごみ拾い



「ヤマメクラブ」のソバ作り農業体験

こどもエコクラブは、年間いつでも登録ができます。会費無料。登録は市区町村の環境担当窓口まで。

お問い合わせ先：こどもエコクラブ全国事務局

(財)日本環境協会 TEL 03-5114-1251

<http://www.env.go.jp/kids/ecoclub/index.html>

深まり、広がっていく環境活動

(1) 学校のカリキュラムに「エコタイム」を設けて

東京都中野区の「沼袋小こどもエコクラブ」では、三、六年生の学年間でクラブを結成して、総

ル」の会場に掲示されます。また、他地域で活動するクラブと直接手紙やメールでやりとりする機会もあります。
はじめはちょっとした活動であっても、継続するうちに、子どもたちの中に環境への意識が高まります。緑の効果を調べることから屋上緑化を実現させたクラブ、ポイ捨てをやめさせたいという子どもたちの提案から、町全体でポイ捨て防止看板を設置する動きにつながっていったクラブなど、全国各地で様々な環境活動が繰り広げられています。子どもたちが大人を変え、そして、地域を動かす。そんな広がりも生まれています。

合的な学習の時間を「エコタイム」として環境学習活動に取り組んでいます。子ども一人ひとりの希望に従い、自然・エネルギー・生きもの・リサイクルの四つのテーマに分かれて活動をしています。学期に一度は「ロングエコタイム」を設けて、自然観察センターや下水処理場などの校外施設にも出かけて体験的な活動を広げています。
全国事務局から配布される会員手帳などのキットは、活動の導入として活用しています。学校の年間の活動の流れに合わせて、こどもエコクラブニュースを通じて紹介される環境学習活動プログラムに取り組んだり、現場での体験を重ねるうちに「今度はこんな活動をしたい」などの様々な感想が出て、さらに興味が高まっています。子どもたちは、区や地域の方々の協力を得て屋上緑化、校庭内ピオトップ作りや草木染めなど、多種多様な活動を展開するようになっていきます。
こどもエコクラブの「自分たちができることは何でもやってみよう」という趣旨を学校でつまく

取り入れて活動を進めています。
(2) 地域とふれあう環境活動
群馬県の「ヤマメクラブ」は、近所の子もたち一人人が集まるクラブです。カイクの飼育観察やセミの抜け殻による自然環境調査、町のごみ拾いや地域と触れあうソバ作り農業体験、毎年実施している水生生物調査など、様々な活動に取り組んでいます。

ソバ作りで出たソバガラは、枕作りに利用しています。みんなで作った枕やアクリルたわしは、県のこどもエコクラブ交流会でチャリティ販売をしました。その売上金は、一昨年までサマーキャンプで交流していた新潟県に震災のお見舞いとて募金しました。
高校生になってこどもエコクラブを卒業したメンバーも、サポーターとして小・中学生の面倒をみて活動を続けています。また、家庭の中でも省エネやリサイクルを実践するなど、クラブの活動は家庭へ地域へと広がっています。

東京都

放課後の遊びの場 BOP

世田谷区教育委員会事務局 地域・学校連携課課長
古関 学

子どもにとって集団の遊びは、創造性や社会性を育てる大切な出会いの場であり学びの場である。しかし、都市化により遊び場は減少し、少子化・核家族化により異年齢児の交流機会も少なくなっている。

世田谷区では、このような子どもを取り巻く環境を考慮して、平成7年度に、児童の放課後遊びと交流の場を確保する「のびのび世田谷BOP」(Base Of Playing = 遊びの基地)事業を、区立小学校8校で開始した。活動場所は、小学校の余裕教室・校庭・体育館等である。放課後の児童にとって、学校施設は、気軽に安心して過ごせる場であり、児童の安全に配慮する上でも有益である。

区は、BOP事業の拡充と併せ、平成11年度からは、BOP事業と保護者の就労支援も視野に入れた学童クラブ機能を併せ持つ形態 = 新BOP事業への転換と導入を各区立小学校で展開してきた。そして、平成17年4月からは、区立小学校64校の全校で展開されている。新BOPは、日曜・祝日及び年末年始等を除き、毎日運営される。原則として放課後から午後6時までであるが、学校休業日は8時30分からの実施となる。

運営は、事務局長(非常勤職員)のほか、登録児童数・施設状況等に応じて配置された常勤職員、非常勤職員、臨時職員によって行われている。

登録児童は、年々増加している。平成16年度においては、区立小学生の約8割の児童が新BOPに登録しており、延参加児童数は約1,239千人に達している。

区では、新BOPの全校導入を機会に、子どもが被害者となる犯罪の増加や社会経済状況の変化等を踏まえ、一層児童の安全や安心に配慮した効果的・効率的な運営の実現に向けた見直しに着手したところである。



北海道

学校林で遊び・学ぼう

美唄市立中央小学校校長
岩城文雄

本校には、札幌ドームの約3倍近い広さを有する学校林がある。本校の学校林はアメリカの教育家ノースロップ博士が提唱し、日本で学校植林事業が開始された明治28年より4年遡って、明治24年に教育財源として設定された。戦前・戦中・戦後、校舎建築の材料や備品・教材・教具の購入の財源に当てられた。その後、学校林本来の活用が薄れ、帳簿上の学校林として管理されてきた。平成14年度より地域の教育資源を生かした特色ある教育活動として、学校林活動を年次的に推進してきている。

3年次目「学校林で遊び・学ぼう」の活動では、北海道立林業試験場・北海道空知森づくりセンター・美唄市の継続的支援体制が整備され、子どもの多様な課題解決が十分可能となる。子どもたちは、年間を通して学校林での様々な体験活動に興味や関心を持って参加してくる。巣箱づくりの体験では、巣箱の穴の大きさで入る鳥が違うことを専門職員から教えられ、子ども一人一人が穴の大きさや位置などに工夫をこらしている。広い学校林のどこの木に巣箱を掛けるか決めるときにも、掛ける方角や地上からの高さ、巣箱同士の位置関係が大事な条件となることを知って、子どもたちの知的探求心がいっそう膨らんでいく。雪山を「かんじき」で歩くことは大変難しく、しかも大変な運動量である。雪穴を掘り、枯れ枝を集めて火をおこしてのパン焼きは最高の楽しい思い出となる。

郷土北海道では特定重点施策として、小学校を対象に林業体験や自然観察会、森林学習フォーラム等を開催する「もりの学校推進事業」が計画されている。

本校の学校林活動は、世代を超えた人間交流や他市町村との交流もできればと、活動の発展を願っている。



沖縄県

夢は大きく、ベスマっ子

～郷土の伝統芸能を受け継ぎ、世界へ羽ばたく～

竹富町立波照間中学校校長
國吉長秀

本校は、有人島としては日本最南端の波照間島にあり、「夢を育む日本最南端の中学校」として、“すべての活動は、生徒のために”を合い言葉に全職員一丸となって諸教育活動に全力を注いでいる。

さて、本校では地域の伝統芸能文化を継承する目的で毎年、全生徒が総合的な学習の時間に「郷土学習」を設定し学習している。地域の方々や郷土史研究家から話を聞いたり、また、学校図書館で郷土の資料等を調べたりして、生徒自ら課題解決のための学習に努めている。特に地域の伝統芸能であるムシャーマ（旧盆開催）の中で演じられる、テーク（太鼓）とポー（棒）については、継承者育成の視点からも毎年、地域の方々に協力をいただき実技指導をお願いしている。生徒達は演技指導を受ける中で挨拶や言葉遣い・マナー等の社会性も身に付ける。その集大成として運動会では、全職員とともに学習の成果を地域の方々に発表している。演じている生徒達の目は生き活きと輝き、その表情は自信にあふれ、その姿は凛々しく、故郷に誇りを持っていることを確かめる時でもある。

このようにして故郷の伝統芸能の良さを肌で感じ、身に付けた生徒達は、過疎化の進む島において伝統行事であるムシャーマの担い手として欠かせぬ存在となっており、地域の人々の期待も厚い。

波照間島には高校がなく、生徒は全員、中学校を卒業すると島外へと進学して行く。そのため、自主性・自立心を培い「生きる力」を育むことは本校教育の重要課題である。今後とも、故郷の伝統芸能文化を大切に、己に自信を持ち、故郷に誇りを持って、世界に羽ばたくことを願って実践していきたい。

*ベスマ…波照間のことばで「私たちの島」の意。



広島県

海の理科大好きスクールとして

～「渡子^{とこの}ものがたり」の構築～

呉市立渡子小学校校長
金沢 緑

本校は、地域固有種のマツバハルシャギクや希少種のハクセンシオマネキなど貴重な動植物が見られる豊かな自然が残ったところにある。町の大半の海岸が護岸工事で砂浜を失っていく中で、校区に残された小さな浜辺をフィールドにして、理科・生活科・総合的な学習の時間の学習を行い、自然の事物や事象から学ぶことのできる子どもを育てている。

学校から歩いて3分の海辺で、子どもたちは自然の事象にくり返し関わり、主体的な問題解決学習を行っている。海の生き物を観察し、同じ生き物でも、住んでいるところによって大きさや色が違うことを実感し、データを集める活動（写真）などを通して、児童は実感をともなった言語を獲得し、言語を媒介として意見交流を行って論理的思考力を高めている。

本校では、育成したい資質・能力面から理科と総合的な学習のカリキュラムを再構築し、「渡子ものがたり」と名付けた海のカリキュラムの開発を行った。

児童の学習過程としては、第一に見通しを持って実験・観察することで、自分の課題を把握し、実験や観察の計画を立てる。次に自力で実験・観察することによって個の学びを充実させる。第三にその結果をもとに話し合いをし、友だちの実験結果や考えと交流して共同で学び合う。最後に、個に戻って自分の思考を深めていく。

このように、「課題把握」「自力解決」「共同解決」「考察」という問題解決学習を通して知的好奇心を高め、論理的思考力を育てる授業の創造を行っている。地域の海を素材にしているため、地域の自然環境を考えることや自分たちのふるさと渡子に誇りと愛着を持つ児童の育成にもなっている。



柳治男『学級の歴史学』

自明視された空間を疑う（講談社）

「組織」としての学校における「学級」存在の意味とダイナミズム

評者 蓮尾直美（三重大学）



近代学校での「学級制」を「自明視された空間」とみなす著者の指摘は、これまで筆者が取り組んできた学級研究にとって興味深く、また刺激的な発想であった。

明治5年のわが国で「学制」施行の当初、「学級制」ではなく、「等級制」が用いられた。そこでは年齢や能力の著しく異なる多様な者が同席して学習することにより、生活集団はほとんど成立することがなかった。

やがて「学級制」を導入した明治24年、国民を近代学校制度に組み入れることにより近代社会に適応しうる「規律ある人間」へと育成した。それは当時の日本が西欧の列強に伍していく上で国として必然の戦略と考えられる。

ところが、著者の見解では、西欧流分業制機能でなく、あらゆる生活機能を包含した村落共同体の論理を「学級制」に持ち込む手法は、当時の国民にとり異質の出来事であったとみなす。

その結果、元来、チェーン・システムと同様の限界をもつ学級の教師は過

大の負担を抱え込む羽目に陥ったという。このような「学級制」の限界に気づかない教育現場では、個性尊重や自主性をめざす理想的な教育言説によって一層混乱に陥り、この矛盾から今日の教育病理は発すると著者はみなす。

筆者は、このような著者の推論を大筋で認めたいと思う。ただし、基本線で気になることは、英国を源とする「近代化装置」の異質性を克服するためにこそ、当時の日本人が独自の文化視点から「学級」を生活共同体として再編し近代日本の基盤づくりに努めてきた叡智を認めるべきではないだろうか。

M. ウェバー流の官僚制組織を演繹的に適用する著者の学級理解は、「組織として」の学校や学級の知見からすれば、実際の姿を正しく把握するものとは言い難い。それは、学校は一般の官僚制組織とは異なる「緩やかな官僚制組織」だからである。すなわち、組織の最前線にいる教師は、相対的な自由裁量のもとに学校成員とのダイナミックな相互行為を営むからである。

小杉礼子編『フリーターとニート』（勁草書房）

ニート、フリーター研究の最先端

評者 中西新太郎（横浜市立大学）



フリーターやニートについて精力的に調査を行ってきた小杉礼子氏を中心に宮本みち子、堀有喜衣両氏の論考からなる本書は、世間から誤解されやすいフリーター、ニートの実像について具体的にたづねている。本書の中心をなす関西と東北51人のインタビュー調査にもとづく分析は、甘い夢を抱いたまま社会に出ることを先延ばしにする若者といったフリーター像、ニート像を正してくれるものだ。

では、なぜ学校から社会への「スムーズな移行」がうまくゆかないのか。その原因を一律にとらえるのではなく、学校とのかかわりや早期離職、家庭環境といった要因にそくして丁寧に検討していることも本書の特徴である。それぞれに事情の異なる若者たちの生活史に立ち入るインタビューにもとづいているからこそその成果ともいえる。

本書は学校による就職斡旋機能がはたらいてきた時代の終わりをはっきりと告げている。従来の枠にとらわれな

い就業支援のとりくみが必要だとする

筆者らの主張に共感するが、それだけに、就職難というきびしい現実に「翻弄される」高卒生徒 典型として東北家庭の類型が本書では指摘されているがもちろん他の地域でもある。からすれば、就職先たる企業の仕事環境を整え、就職機会を広げて欲しいと願うのは当然だろう。正規職で働ける環境の整備と相まってはじめて就業支援の効果も望まれるはずなのだから。

なお、著者たちが中心となった若者就業支援対策、包括的自立支援の提言は、労働政策研究・研修機構や内閣府検討会文書として公表されているので参照されたい。

本書の検討を真摯に受けとめると、高校、大学での進路指導が改めて問われる。旧来の進路指導に安住できない以上、広い意味での職業教育の内容にも踏みこんでの研究、具体的な模索が必要であることを、本書は、学校に頼れない若者たちの声をつづじてまざまざと示した。教育関係者ははたしてこの要請にどう応えられるだろうか。

Column

10代心のカルテ その①

香山リカ（精神科医・帝塚山学院大学教授）



若

者は、自意識過剰で自己愛的だ。こんなことばがよく聞かれる。しかし、本当だろうか？ 診察室にいと、強気の仮面をつけ、ゴーマンの皮をかぶった若者たちの本当の姿が見えてくることもある。それは、自分に自信が持てず、「人にきらわれるのではないか」といつもおびえている弱く小さな幼児のような姿であることも多い。

たとえば、「学校なんかつまらない」と高校をサボり、夜遊びを繰り返しているサチエという少女がいた。もちろん、夜遊びだけで精神科の受診対象にはならないが、「心に何か問題があるのでは」という親のたつての願いで、渋々、診察室にやつて来たのである。

「何か話したいこと、困っていることはないですか」ときくと、サチエはこちらを見下したような表情で吐き捨てるように言った。「あなたに話すことなんてないよ、私は病気なんかじゃないんだよ！」。

「私もあなたが病気には見えないけれど、せっかくならんだし時間まで雑談でも」と好きな音楽やファッションの話題を振ると、意外に素直に会話に心じる。そして、あれこれ話さず、サチエはぼろつとこう言ったのだ。「私なんて不良品だから。サチエは自分が、友だちからも親からも相手にされていない中途半端な不良品だ、と思っ込んで

強気の仮面をかぶったサチエ

いるようなのだ。だから、家にもいられないし、かと言って友だちと夜の街をうろついていても、今ひとつ楽しくない。「どこにも私の居場所なんてないんですよ」とつぶやくサチエの顔から、先ほどまでの傲慢さは消えていた。

私

は、少なくとも今こうして話している、サチエを「不良品」だなんてまったく思わないこと、おそらく親や友だちもそんなことは感じていないはずだということを、さりげなく話した。あまり思いを強調しすぎると、かえって演技めいてしまつて拒絶されるからだ。

「正直に言つて、私はこうしてあなたと話していて楽しいんだけどね」と言つと、サチエは「マジ？」とまんざらでもない顔をした。サチエは「心の病」にかかっているわけではないので、それ以上治療を継続する必要はないと考え、私は本人と親にそれを伝えた。診察室を去るサチエは、「私を、不良品」って思わない人もいるんだよね？ あなたもそうだよね？」と確認を求めるように、私の顔を見た。私は「そつだよ」と目で語りながら、笑顔でうなずいた。

傲慢に見えたのは外側だけで、本当は「私なんて」とおびえていたサチエ。彼女の心にもつたさやかな自信が、今後の生活を少しずつ立て直すもの、と私は信じている。

読者のページ

Educo Salon

【エデュコサロン】



ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
教育出版 Educo編集部
FAX: 03-3238-6975
e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

河合雅雄氏の記事を頷きながら読んだ。人間は社会的な動物でありながら、子どもの時期に身に付ける「自然」を失っている。学力低下に血眼になるよりも、子どもたちが「学校の勉強が楽しくない」と言い、社会性が育っていないほうが大問題という指摘は同感である。「大人になったら独立して立派な社会人としてやっていける子どもを育てることが根本」ということを親も教師も今こそ共通理解すべきだ。今野氏の「揺らぐ『ゆとり教育』」という記事で、同様の論旨が違う分析をもって載っていたので興味深かった。時間のゆとりと気持ちのゆとりを子ども達に保証してやる。自然や仲間とかかわり合い、学び合う「居場所」を学校や地域が提供できる道を模索する時期がやってくると思う。（愛知県 福岡高之）

「揺らぐ『ゆとり教育』 現場に根ざした改革論議を」は、まさにタイムリーな提

言であり、文脈一つ一つを己の心に納得させて取り込むことができ、溜飲の下がる思いであった。これまでも、教育は国家百年の計と言われ、周到な現状分析のもと、日本の将来の在るべき姿を正しく見据えての教育の方向・教育の在り方の決め出しを行ってきつたと信じてきましたが、学力の数値のみを盾とした文部科学大臣のひと声は、現場感覚と乖離しているように思えてならない。「ゆとり教育」を現場なりに意味づけを行い実践してきている状況に対し、拙速で安易な方向にだけは舵取りをしてほしくないと思っています。

（北海道 笹原志郎）

文部科学大臣が「総合的な学習の時間」の削減、土曜授業実施等について発言したこと、そして、世論（特に世の母親を中心に）に学力調査の学力向上論が高まっていることに強い危惧感を持っている。せっかくな

しい時代の日本人の育成のための教育に今までにないよい視点が見出され、やっと実践が始まったと思う時にである。私は国語の時間を増やし、「考える力、感じる力、創造する力、表す力」を高め、全ての教科の基礎的な力をつけ足腰を確かにし、その上で「総合的な学習」で生きる力をつけていくことが必要だと考えている。学力向上という名目のもとで、形式的知識を詰め込む教科学習になつてはならない。河合、今野、環境省、矢島、他諸氏の全部の記事の内容に同感し、もっと人間的な子育てに向かう教育を願っている。（東京都 藤田慶三）

「学力低下」の問題が叫ばれ、今、学校現場は大変であろうと推察する。現場に根ざした改革、特に方法論を含めて掲載していただければと思います（今回の「揺らぐゆとり教育」がOECDの調査の内容にふれていましたが……）（北海道 熊井高司）



◎原田選手は小学三年のときジャンプ少年団に誘われ、ジャンプの魅力にとりつかれていく。

私は北海道の上川町で育ちました。子どもの頃はよく近所の友達と野球をしたり、スピードスケートをしたり、スポーツは結構万能でしたよ。ジャンプ少年団に入ったのは夏でしたから、跳び箱からマットに飛びおける練習から始めました。力強く踏み切って飛ぶようにコーチに指導され、この頃に高く飛び上がる私のジャンプの基礎ができたのかも知れませんがね。

中学一年のときに全国大会で優勝し、その後、東海大四高から雪印へとジャンプ一筋の生活を続け、全日本のメンバーに選ばれて、ワールドカップ、オリンピックなどの世界の大舞台を経験することができました。

◎V字ジャンプとの出会いが、原田選手を一躍世界のトップレベルへ飛躍させた。

私がジャンプを覚えた頃はスキーをそろえて飛ぶクラシカルスタイルでしたが、一九八九年のワールドカップでスウェーデンのポークレブ選手がV字ジャンプで総合優勝し注目を浴びました。これを見て、日本のジャンプ陣の中で最初にV字にトライしてみました。

すると、それまで体験したことがなかった風を全身に感じて、背中を大きな力で引つ張られているような感覚に包まれました。それから練習を繰り返してV字をマスターし、アルベールビルオリンピック(1992)では、個人戦ラージヒルで四位、団体でも四位に入賞しました。

◎リレハンメルオリンピック(1994)での、世紀の失敗ジャンプの後、長いスランプに陥る。



日本ジャンプ界のエースとして活躍中。1993年世界選手権ノーマルヒル優勝をはじめ、数々のビッグタイトルに輝く。

三人が二本目を飛び終わったところで日本は一位のドイツに大差をつけてトップにたちます。日本の金メダルは確実と期待が高まる中、私は二本目に挑みました。自分では十分リラックスしていたつもりでしたが、予想外の失敗ジャンプで、日本は金メダルを逃しました。その後、私は長いスランプに陥ってしまいました。

この年に、私は結婚したのですが、リレハンメルの失敗に対してずいぶんいやがらせの電話がかかってきて、妻にとっても最も辛い時期だ

が変わってしまいましたね。それまでは、一本目に失敗すると、二本目を投げ出すこともありましたが、結婚してからは最後まであきらめないという気持ちが強くなったと思います。

ジャンプは野球と違って、イチロー選手のようにヒットを重ねるだけではだめなんですね。いつもホームランを打たなきゃいけないんですよ。松井選手のように、つまり、イチロー選手の確実性と松井選手の飛距離の両方が求められるんです。確かに運が左右することもありますが、

よ。不利な風が吹いて実力以下しか距離が出なかつたり、逆に有利な風が吹いて予想以上に距離がのびるということもあります。失敗をなるべく小さいものにするための努力の大切さを、あの苦い経験を通して学びました。

◎ベテラン原田選手は、前人未踏の五大会連続出場をかけて、トリノオリンピック(2006)に挑んでいる。

脚光を浴びた長野オリンピックの後、ソルトトレイクでは、期待されながらメダルなしに終わり、日本ジャンプ陣は一体どうしたんだとマスコミは書き立てました。そういう苦い経験をして、終わった次日からトリノオリンピックに向けて準備してきました。技術的にはV字をやや広げるジャンプに改造し、その努力が、今、実を結びつつあると実感しています。

◎リレハンメルオリンピックに出場して、また感動的な金メダルをとって、みなさんに「原田あり」というところをみせたいなと思っていました。

地球温暖化を防止する取り組みの一つに「クールビズ」がある。この夏、小泉総理がノーネクタイのシャツ姿でしばしばテレビに登場し急速な広がりを見せた。このほどその効果が試算され、6~8月に節約された電力は約7000万キロワット、一般家庭が1か月に使う電力に換算すると約24万軒分に相当するという。

「チーム・マイナス6%」も、同じく京都議定書のCO₂削減目標を達成し温暖化を防止するための国民運動である。弊社も遅まきながらその一員に名を連ねた。畠山さんはCO₂を吸収し固定する働きを持つ「海の森林」が汽水域にあり、光合成の量も陸の森林より多いのではという。森づくりに大きな副産物がある。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わるうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。